
墮天使によろしく

毛がに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

堕天使によろしく

【Nコード】

N9432D

【作者名】

毛がに

【あらすじ】

主人公、緒方大助は、ごく普通な不良高校一年生だったが、ある日霊感が強い大助に釣られてきた天使と名乗る少女に取り憑かれてしまう。『貞子』と名付けられた少女と大助の間に、奇妙な絆が生まれていく。

序章（前書き）

出来ればご感想をお待ちしております。

序章

どうして、私は死ぬのかな――。

どうして、私でなければいけないのかな――。

どうして、私ばかりがこんな目にあうんだろう――。

人は生まれた瞬間から死に始めている。

誰かがそんな事を言っ、私はそれを聞いた時に疑問を覚えました。

確かに、人は生まれた瞬間に死に始めている。でも、死ぬまでの時間は果たしてどうなのでしょう。

寿命という言葉があります。でもその言葉を私に当て嵌めるには余りにも残酷過ぎやしませんか？

不本意にも、私はもうすぐ死にます。

スタートは皆同じなのに、こんなにも差のあるゴール。

いいえ、終わらせてたまるものですか。

私はまだ、生きています。

そして生き続けるために、私はある選択をしようと思います。

私は薬を飲もうと思います、――悪魔の薬を。

私には何故、この薬が悪魔の薬と呼ばれるのか分かりません。

だって、この薬には天使になって生き延びる事が出来ると書かれているのですよ？

不安はありません。むしろ幸福です。

私はまだ、生きたい――。

序章（後書き）

初めまして、ヘタレ駄文家もどきの毛がにと申します。

まず、同小説ページを開いてくださった事、御礼申し上げます。

何分初めてなもので、至らない部分や表現の間違いが多いですが、どうかご容赦を。そして

第一話 邂逅

空気の抜ける音と共に開く電車の扉。押し出されるように外に出る。

朝の駅のホームには、まるで漣のような人の波が引いては押していた。

波を構成している人々は皆、一方向だけを見つめ、進んでいた。その中に立ち止まる者は誰一人として居ない。

居るとすれば、それは目的地の定まらない暇人か、立ち止まって小さなタンポポを眺める余裕のある人物か――。

その少年は、恐らく前者だった。

学生服をだらしなく着こなし、脱色した長髪が特徴的な少年は、どんよりとした、冬ならではの分厚い雲に覆われた空を見つめていた。

ホームから出、詰まった水槽のフィルターのような改札を抜け、東華市のビル街に入る。

辺りには学生服を着た少年少女が楽しそうに談笑しながら歩いており、彼らは皆、首にヘッドフォンをぶら下げた目つきの悪い少年と真正面からすれ違っていった。

学校に行くつもりは、無かった。

既に同じ制服を着た者は一人として居ない。

しかし、主要都市だけあって人通りと、それに見合う道幅の広さは壮大なものがあつた。

そして、少年の通学のものとは思えないゆっくりとした歩みは、唐突に大通りへと突き当たり、そこは大きな交差点となっていた。信号が青になるのを、ボンヤリと待つ。

駅とは反対方向に向かっているせいか、同じ方向を向いてそれを

待つ者は居なかった。

対して車道を挟んで向こう側には、たくさんの学生やサラリーマンが居て、こちらを見ていた。被害妄想で無ければ、その表情は一樣に疑問の色を浮かべていた。

何故学校に行かないのか？――。

そんな視線から逃れるように、少年は視線をずらし、交差点の中央に向けた。

もちろん車道が交差するような危険地帯に人は居ない――“筈”だった。

「……ん？」

少年の漏らした声。

何か、羽根のような物が舞った気がしたのだ。目を凝らし、もう一度そこを見つめる。

そして、見た。

「……あれは……鳥か？」

いや、そんなわけではない。

あんなに大きな鳥がいるものか……。それに――。

それに、あれは……人？

そこまで理解が追いついて、ようやくそれは確信に変わった。

交差点の中央に立っていたのは、少女だった。

ヘッドフォンの少年と変わらない、十七程の少女。

しかし少年が目を見開いて驚いた事からも分かるように、彼女は普通の少女では無かった。

少年は背中に漆黒の翼を生やしている女の子など、見たことが無かった。

背中に翼を生やした少女は、片目を完全に覆い隠している長い黒髪の振り乱し、まるで舞を披露するかのように妖艶に踊っていた。彼女が着ているのは純白の和服で、それが黒い髪と漆黒の翼のコントラストとなり、妙な幻想的ともいえる艶めかしさを放っている。「な……」

少年はその光景に呆気に取られ、絶句していた。どのくらい見つめていただろうか、車道の青信号が点滅しだし、前方のサラリーマンや学生達が身じろぎをする。

そして動き出した人の波によって翼を生やした少女が少年の視界から外れる一瞬前、

「……」

少女が一瞬、流れるような黒髪に隠れていない片目を少年の視線に合わせ、すっと微笑んだのだった。

少年は信号の色が変わっても、その場に立ち尽くしていた。前方からやってきた人の波は、防波堤となっている少年に不審げに見つめ、すり抜けていく。

動けない少年が視線をずらすと、隣にあったブティックのショーウィンドにヘッドフォンを首に引っかけた間抜け面が映っていた。『ズザザ、聞こえますか？ って、聞こえませんか。目が合ったのも偶然なんですよね。ズザザー』

その時、ヘッドフォンから、声がしたような気がした——というか、した。

酷く自信の無い気弱な少女の声が、ノイズ混じりにヘッドフォンから響いていた。

「な、何？」

その声が逆に覚醒剤となり、少年は鼻を弾かれたように我に返ると、ヘッドフォンのスピーカを耳に付ける。

声はまだ、続いていた。

「あー、あー。うん、感度良好。なかなか良い素材使ってますねこ

れ。聞こえないのが本当に残念です……」

い、一体、何なんだ？――」

少年はひたすらに、困惑し続ける。

声の主は、もしかしてあの翼を持った少女だろうか。

いや、十中八九、そうなのだろう。

むしろそうでなければおかしい。先ほどの不思議とこれが全く関係の無い出来事だったらきっと大脳がショートするのは必至だろう。

だから、少年は答えた。

あの漆黒の翼を生やした少女に向かって。

「聞こえて」ます。……あなたは……悪魔ですか？」

声はすぐに、届いた。

「違います！ ハズレです！ 論外です！ 私のどこをどう見たら悪魔に見えるっていうんですか？ 私は天使ですよ。ズザザー」

「え？」

声と共に、少年の視界は漆黒の羽根に覆い尽くされた。

夜闇のものとは違う、染められた黒。

その中に、純白があった。

「初めまして、誰かさん。私は誰かさんです。よろしく」

漆黒の片目が、こちらを楽しそうに見つめている。

漆黒の空間の中で、漆黒の少女が、純白の和服を着て楽しそうに笑っていた。

「あ……」

喉から絞り出すように、少年は言う。

「俺は……」

そんな唐突な、始まりだった。

昼前とあって、適当に入ったファミレスの中は閑散としていた。四人が囲めるようになっていてテーブルに着くと、ヘッドフォンを付け、学生服を身に纏い、“一人”でファミレスに入った少年に不審な目を向けるウェイトレスに適当なドリンクを頼む。

目の前には満面の笑みで翼の手入れをしている黒髪の少女がいた。おしぼりで手を拭き、一度目を閉じる。

目を開けても、少女はそこに居た。

少年は一度息を吸い、言った。

「で、あんた誰だ？」

答えは何故か、ヘッドフォンから。

「ですから、私は誰かさんですよ、大助さん」

「……もしかして、名前が無いのか？」

咄嗟に思いついた事だったが、そういう可能性もありえたので訊く。

すると、

「はい、忘れました」

そんな事を少女は言った。

翼がテーブルの外にはみ出していた。

「忘れたってな……。あ、あとお前、俺以外の人間には見えないのか？」

大助は更に訊く。少女は笑顔を崩さない。

ヘッドフォンからソプラノが響く。

「はい。というか、誰にも見えない筈なんですけど、何であなたには見えるんでしょうね。まあ靈感が強いからなんですけど、ってそれに惹かれてホイホイついて行ったのは私でしたね、ごめんなさい」

チンプンカンプンな事を言う少女。

大助が訊き返すと、少女は困った顔をした。

「ですから……」――。

それから、先ほどのウェイトレスが一人分のドリンクを持ってくるまでに彼女が話した事を要約すると、こんなものだった。

曰く、少女は天使で、霊に近い存在である事。

しかしただの霊とは違い、ちゃんとした意思をもって行動出来るという事。

霊と同じような存在であるため、靈感のある人間に磁石のように吸い寄せられるという事。

そして少女は靈感の強い大助に惹かれて現れたという事。

そして、ここからが肝心な事。

「はあ？ もう俺に取り憑いただってえ？」

そういう事である。

つまるところ、大助の肩には白い腕が乗せられているという事である。

「はい、ですけど、私は天使ですから、もちろんご利益がありますよ？」

もう何が何だか分からなかったが、とりあえず訊く。

「ご利益って？」

「はい、あなたの生活を出来るだけサポートします。要するに、副が来るという事ですな」

ヘッドフォンを介してそう言った少女は少しだけ、小首を傾げて笑ったのだった。

ファミレスを“一人”で出、腕時計を見ると、丁度12時を回ったところだった。

「これからどこに行くんですか？ 学校ですか？」

背後にピツタリと付いてきているのは、黒髪の和服少女だった。

少年は後半の言葉に顔をしかめる。

「学校には、行かないんだ。さあ、行くぞ」

「どこにですか？」

「帰るんだよ」

言って、足を速める。

天使と名乗る少女に憑かれるという異常事態が発生したというのに、少年の心境には、余り変化が無かった。

それは大助自身にもよく分からない事だったが、どうでもよかった。

一雨きそうだ…。

それは漠然とした不安だったが、同時に確信を持った恐怖でもあった。

分厚い雲は、太陽を隠し、東華市を飲み込むように、横たわっていた。

第二話 接吻

雨が降る。辺りは夜のように暗かった。少年が走っていた、緒方大助である。

上空に集まりつつあった不穏な雲は、示し合わせたように東華市全体に降雨をもたらしていた。

「チツ、予想外に早かったなあ、早く帰らないと」
雨足よりも早く、少年は路地裏を駆け抜け、帰路へと着いていた。

と、その背後に、気配が生まれる。
気まぐれな蝶のように漆黒の翼を羽ばたかせ、少年の背後にピツタリと付いてきている少女が居た。

自らを天使と名乗ったその少女は、純白の和喪服に身を包み、何故かニコニコと微笑んでいるのだった。

「あのお、何でこんな気持ちの良い雨の中を走らなければいけないんですかあ？」

少年が首にかけたヘッドフォンから声が響く。心地よいソプラノ。
「どこが気持ち良いって？ …… お前を見た時、確信したんだよ。今日はあいつ等が出てくる」

少年の横顔は、何かに怯えるようにやや引きつっていた。

漆黒の少女は、尚も何故少年が急いでいるのか分からないといった風に首を傾げ、気まぐれに浮遊を続けている。

辺りは夜のごとく、暗かった。心無しか狭い通りにはすれ違う人も居ない。

気味が悪いとは、この事だった。

ポタツ——。ポタツ——。

雨の音。雫の落ちる音。

返されたバケツの水の音に混じり、何かがひしめいていた。

と、その時だった。

「チイツ、やつぱりだ」

少年が唐突に足を止める。フラフラと背後を舞っていた少女が勢い余って少年の背にぶつかる。「ふぎい」とくぐもった声を上げ、少女は形の良い鼻を押さえうずくまった。

「なんへ、きゆうにとまふんへふはあ？」

『何で急に止まるんですか？』と言っているらしい。

「あれを見る」

少年が顎でしゃくる。少女は雨で視界の悪い前方に涙目を凝らす。

「あれは……」

道の端、電柱の影に、黒い何かが居た。

見ようによつてはうずくまった子供のように見えるそれは、モゾモゾと動きながら、しかし決して影から出ようとはしなかった。

空はどんよりと暗い。それでも僅かに差し込んだ陽光が電柱に遮られ、影を作る。

そんなわずかばかりの陽光からも隠れるように、黒い何かは身を潜めていた。

自らの言葉を確かめるように、漆黒の少女が呟いた。

「迷魂^{まごいし}、見捨てられた魂、……ですね」

少年の神妙な表情が微かに動く。肯定。

「あれは普通の人間には何もしない。だが」

言葉の続き、死神のような容姿の少女が継いだ。

「靈感の強い人間の魂を喰らおうとする」

うづくまっていた黒い物体が顔を上げた。何かを探すように、キョロキョロと見回す。

モゾモゾという動きは、止まっていた。それは目的を持った証。そして、見つける。見えない筈の自分をその瞳に映している少年を。

黒い物体は、人間の形をしていた。背丈で言うと十歳程の子供程。染められたような漆黒は隣の少女の翼に似ている。しかし、物体は全身だった。

頭部には血を吸ったような赤い光を放つ対の目。そして同色の口。気付かれたな……」

深紅の口がニイツ、と裂けていく。そして笑みの形に歪む。瞳に少年を宿した化け物が浮かべているのは、歓喜の笑みであった。

獲物を見つけた、狩人の笑み。

少年の背筋に怖気が走る。

「さあ、…どうする？」

同様する内心とは裏腹に平静を保ちつつ、隣に佇むある意味化物と同族と言える少女に問う。

応えを待つ間も、少年は退路を必死に探していた。

通りは狭く、振り向いて逃げれば確実に喰いつかれる。

かといって振り切つて逃げるのも危険だ。

どうすれば良い？――。

分からない。

と、ヘッドフォンから鈴のようなソプラノが舞い込んできた。

「私は天使です。天使と霊の違いは、憑依した宿主を守護するか否かです」

意味の分からない事を言う。

「どういう事だ？ お前は俺を助けてくれるのか？」

「はい」

そついう事らしい。

半信半疑に、雨の中伝う冷や汗を払いながら少年は叫ぶ。

「じゃあ早く、助けてくれっ！」

「ちよつと待って！ それには……少しだけ条件が……」

齒切れの悪い漆黒の天使。少年は当惑する。

眼前の化け物はジリジリと歩み寄ってきている。

一刻の猶予も無い。

「何だよっ！ 早く言えって！」

「——キスしてください」

一瞬、思考が止まった。

はい？ 何だって？——。

止まった思考で浮かんだ言葉を口に出す。

「はい？ 何だって？」

「だから、キスしてくれないと、私は能力を使えないんですよっ！」

「冗談も、いい加減に……」

——しろ！ と言おうとして、戦慄が走った。

『キシイイツー！！』

まるで大音響のノイズのような鮮烈な叫び声が響き渡った。

「なっ！」

視界の端に捉えていた筈の化け物が一瞬で姿をくらましたのだ。

視線をずらし、どこへ行ったのかと視界の悪い中走らせる。

そして見つけた時には、遅い。

「速っ！？」

高速で腹下に潜り込んで来た化け物の漆黒の爪の一撃をかるっじ

て避ける。

しかし避け切れず、ブレザーのタイの一部を持っていかれる。反応出来たのは奇跡だった。間違えば持っていかれたのは首だっただろう。

その事実には戦慄が走り、少年は背後によろける。

柔らかい感触は、漆黒の少女だった。

ええい、こうなったら“やぶれかぶれ”だっ——。

「我慢しろよなっ」

「えっ？」

この期に及んで驚きの声を発しようとする少女の唇を唇で抑え込む。

雨の中、抱擁を交わす二人を見た人間は何と言うだろう。

恋人？——。

否、この状況は一般人には見えないのだった。

それに、こんな殺伐としたキスがあるうか。

銀色の糸を引き、一瞬の接吻は終わった。

ファーストキスの味はレモンなどとほざいたヤツが居た。

それを信じた時もあったが、今この瞬間、少年は断言出来た。

「鉄の味がする……」

すなわち、血の味。

『キシヤアアアッ！』

ほろ苦い青春の味を噛み締める余裕も与えず、化け物は迫ってきた。

その表情には憎悪が垣間見え、殺意によってのみ動いていた。顔をしかめる少年。嗤う化け物。

相対する者がぶつかる、その時だった。

「黒い炎よ、白き雷よ、決して交わらない我らを今融合させ、邪悪なる者を滅ぼせ！」

唐突なソプラノの詠唱が響く。

どこからかと言えば、それは少年のヘッドフォンからだった。

四つの瞳が、少年曰く血の味のする唇を持つ少女へと向けられる。そのうち二つの瞳は、驚きによって見開かれた。

「お前、翼が……」

そこに居たのは、天使であつた。

見紛う事無き、純白の天使。白鳥のような汚れなき翼をはためかせる乙女だった。

詠唱の後、天使はゆつくりと微笑む。

一瞬、化け物が動きを止める。

『キシヤ？』

疑問符のような鳴き声を上げる漆黒の化け物。

一瞬後、その体は分厚い雨雲から落ちた雷によって打ち砕かれた。「うわあぁっ！」

あまりの衝撃波に少年の制服は震え、脱色した長い髪は全て後ろに煽られた。

「……」

静かな瞳でそれを見つめる、翼を持つ少女が居た。

悲鳴さえ残さず、化け物は霧散した――。

雨雲は雷を放ったせいか、バケツの水が空になったせいか、中心から切れていく。

そこから差し込むのはもちろん陽光で、それはたちまちに東華市全体を照らしていった。

一瞬前、確実にそこにあった戦場をかき消そうとするかのように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9432d/>

堕天使によろしく

2010年10月10日02時37分発行